

試験日 : 2026 年 2 月 23 日 (月)
入試種別 : 大学院入学試験(4 月入学)博士後期課程 春期試験
学部・研究科 : 文学研究科 真宗学専攻
科目名 : 第 2 群 ②仏教漢文

問 1 <解答例>

(1)

書き下し：無量寿仏の光明は顕赫にして、十方諸仏の国土を照耀して聞えざることなし。ただ我のみ今その光明を称するにあらず。一切の諸仏・声聞・縁覚・諸の菩薩衆、ことごとく共に嘆誉すること、またかくのごとし。もし衆生ありて、その光明威神功德を聞きて日夜に称説し、心を至して断えざれば、意の所願に随ひて、その国に生ずることを得て、諸の菩薩・声聞大衆の為に、共に嘆誉しその功德を称せられん。それ然して後、仏道を得る時に至りて、あまねく十方の諸仏・菩薩の為に、その光明を嘆ぜられんこと、また今のごとくならん。

現代語訳：無量寿仏の光明は明るく輝いて、すべての仏がたの国々を照らし、その名の聞えないところはない。わたしだけがその光明をほめたたえるばかりでなく、すべての仏がたや声聞や縁覚や菩薩たちも、みな同じくほめたたえておいでになる。もし人々がその光明のすぐれた功德を聞いて、日夜それをほめたたえ、心をこめて絶えることがなければ、願いのままに無量寿仏の国に往生することができ、菩薩や声聞などの聖者たちにその功德をほめたたえられるであろう。その後、仏のさとりを開いたときには、今わたしが無量寿仏の光明をほめたたえたように、すべての世界のさまざまな仏がたや菩薩たちにその光明をほめたたえられるであろう。

(2)

書き下し：「説願偈総持、与仏教相応」とは、「持」は不散不失に名づく。「総」は少をもつて多を摂するに名づく。「偈」の言は五言の句数なり。「願」は往生を欲樂するに名づく。「説」はいはく、もろもろの偈と論を説くなり。総じてこれをいふに、願生するところの偈を説きて、仏経を総持し、仏教と相応するなり。「相応」とは、譬へば函と蓋とあひ称へるがごとし。

現代語訳：「願生偈を説いて総持し、仏の教えに相応する」というのは、「持」とは失わないでたもち続けることをいう。「総」とは少ない言葉で多くをおさめることをいう。「偈」とは五字の句の連なりである。「願」とは往生を願い求めるという意味である。「説」とは、願生の偈頌と解説の長行を説くということである。これらをまとめると、願生の偈を説くことで、経典の内容をおさめたもち、仏の教えに相応するということである。「相応する」とは、たとえば箱と蓋とがぴたりと合うようなものである。

(3)

書き下し：もしよく上のごとく念々相續して、畢命を期となす者は、十はすなはち十ながら生じ、百はすなはち百ながら生ず。何をもつての故に。外の雜縁なくして正念を得るが故に、仏の本願と相應することを得るが故に、教に違せざるが故に、仏語に随順するが故なり。もし專を捨てて雜業を修せんと欲する者は、百は時に希に一二を得、千は時に希に三五を得。何をもつての故に。すなはち雜縁乱動するによりて正念を失するが故に、仏の本願と相應せざるが故に、教と相違せるが故に、仏語に順ぜざるが故に、係念相續せざるが故に、憶想間斷するが故に、廻願慍重眞実ならざるが故に、貪・瞋・諸見の煩惱来り間斷するが故に、慚愧・懺悔の心あることなきが故なり。

現代語訳：上に述べたように命終るまで念仏を相續する者は、十人であれば十人すべて、百人であれば百人すべて、みな往生することができる。なぜなら、外からの様々なさまたげがなく正念を得るからであり、阿弥陀仏の本願にかなうからであり、釈尊の教えと相違しないからであり、仏がたの言葉にしたがうからである。もっぱら念仏することを捨てて雜行を修めようとする者は、百人の中でもまれに一、二人、千人の中でもまれに幾人かが往生できるだけである。なぜなら、様々なさまたげに乱されて正念を失っているからであり、阿弥陀仏の本願にかなっていないからであり、釈尊の教えと相違しているからであり、仏がたの言葉にしたがっていないからであり、淨土に思いをかけ続けられないからであり、阿弥陀仏を思う心が途切れるからであり、往生を願う心が眞実でないからであり、貪りや怒りや誤った考えなどの煩惱がおこって思いが途切れるからであり、恥じる心、悔い改める心がないからである。

問2 <解答例>

設問（1）

書き下し：二には、『双卷經』の三輩の業、浅深ありといへども、しかも通じてみなのためはく、「一向にもつぱら無量寿仏を念じたてまつれ」と。三には、四十八願のなかに、念仏門において別に一の願を發してのためはく、「乃至十念せん。もし生ぜずは、正覺を取らじ」と。四には、『觀經』に、「極重の惡人は、他の方便なし。ただ仏を称念して、極樂に生ずることを得」と。五には、同じ『經』にのためはく、「もし心を至して西方に生れんと欲はば、先づまさに一の丈六の像の、池の水の上にましますと觀ずべし」と。六には、同じ『經』にのためはく、「光明あまねく十方世界の念仏の衆生を照らして、攝取して捨てたまはず」と。

現代語訳：二つには、『無量寿經』に説かれる三輩の行には、浅い深いの違いはあるが、共通して「ただひとすじに無量寿仏を念じるがよい」と説かれている。三つには、四十八願の中で、念仏の教えについて特別に一つの願をおこし、「わずか十回でも念仏して、もし生れることができないようなら、わたしは決してさとりを開かない」と説かれている。四つには、『觀無量寿經』に、「きわめて重い罪をかかえた惡人に、他の手だてはない。ただ称名念仏することで、極樂世界に往生できるのである」と説かれている。五つには、同じ『觀無量寿經』に、「もし心から西方極樂世界に生れたい

と思うなら、まず一丈六尺の阿弥陀仏の像が、池の水の上におられると思い描くがよい」と説かれている。六つには、同じ『観無量寿経』に、「阿弥陀仏の光明は、ひろくすべての世界の念仏する者を照らし、摂め取ってお捨てになることがない」と説かれている。

設問（２）

親鸞は、『顕浄土真実教行証文類』の第二「行文類」に、大行釈の引文の一として、源信『往生要集』からこの傍線部を引用し、またその内容に基づき「正信偈」依釈段の源信章に「極重悪人唯称仏」と示しているが、第六「化身土文類」では、「行文類」に引用したこの内容を要門釈結びの自釈に用い、「楞嚴の和尚の解義を案ずるに、念仏証拠門のなかに、第十八の願は別願のなかの別願なりと顕開したまへり。『観経』の定散の諸機は、極重悪人、ただ弥陀を称せよと勸励したまへるなり。濁世の道俗、よくみづからおのれが能を思量せよとなり、知るべし」と示している。これは、当時の出家・在家すべての者に向け、極重悪人でしかない自身に諸行はとてつとまらないことに気づき、要門として『観無量寿経』に説かれた定散二善等の自力諸行による浄土往生の思いを離れ、第十八願に基づく他力真実の念仏往生を願い求めるよう、強く勧めるものであり、源信の言葉により真宗教義を証したものと考えられる。